愛知教育大学研究報告，44（人文科学編），pp. 21～32, February, 1995

シムズとアメリカ独立革命
——1830年代の革命ロマンスを中心にして——

中　村　正　廣

（外国語教室）

Demythicizing the Revolution in Simms's Early Revolutionary War Romances

Masahiro NAKAMURA

(Department of English)

William Gilmore Simms (1806-1870) は長編の革命ロマンスを七作発表している。シムズがアメリカ革命に多大な関心を示したのは彼が育った環境によるところが大きい。母親を幼くして亡くし，父親と切り離された状況に育ったシムズは，母方の祖母ゲイツ夫人に育てられた。独立革命では愛国派の主張に共鳴し，チャールストンで戦っていた前夫のジョン・シングルトンに合流するため英軍の砲火の中をくぐり抜けたこともあるこの女性は，革命時の事件をシムズにつぶさに語って聞かせた。これによって独立戦争への関心を喚起されたことをシムズははっきりと認めている。また，シムズの幼年時代のアメリカには革命の栄光の香りが色濃く漂っており，チャールストンには革命の記念碑や戦跡が多く残っていた。

十九世紀初頭からジャクソニアン・デモクラシィの時代にかけてアメリカ革命はアメリカ市民の一大関心事であっただけでなく，文学者の間でも特異な素材として注目された。クーパーの実質的な処女作ともいえる『スパイ』が出版されたのは1821年，そしてこの小説を書評したガーディナーが歴史ロマンスの三大素材のひとつとして独立革命を挙げたのは1822年であった。文化における独立宣言とも言うべき「アメリカの学者」の中で，「コンコード・ヒム」の作者エマーソンが，「人が生まれてみたいと思う時代があるとすれば，それは革命の時代であろう。古いものと新しいものが肩を並べているため，比較できるからであり，また人間の能力が恐怖と希望によって探られるため，古い時代が持つ歴史的栄光が失われても新しい時代の豊かな可能性がそれを埋め合わせることができる時代だからだ」[1]と述べたのは1837年であった。

このような環境の中で，シムズがアメリカ革命を文学におけるアメリカニズムを飾る素材のひとつとして捉えたのも当然であった。アメリカの歴史を大きく四つのエポックに分けた彼は，そのひとつに革命前夜から革命に至るまでの南部のパルチザンの戦いを挙げ，そして独立革命を愛国派と王党派の内戦と規定した。今回取り上げる1830年代初頭，シムズはチャールストンの上流社会に属してはおらず，当時南部に強かった連邦法適用拒否主義に真っ向から反対していた。1836年シェヴィレット・ロウチとの結婚によってプランター階級に属し，後年南部のスポークスマンとして活躍するようになるが，1830年代はその影響はまだ見られない。本稿では『パルチザン』(1835)と『メリチャム』(1836)を取り上げ

るが，結論として，ホイッグ的な歴史観を持つシムズが1830年代に書いた革命ロマンスにおいて，アメリカ革命を自由と独立という大義のための戦いとして捉えることに躊躇する姿勢をはっきりと見せていることを指摘したい。

(1)

シムズは歴史家としても活躍した。彼は真の歴史家たる芸術家だけが散乱した事実の断片に関係を付与できると考えた。シムズの主張する歴史哲学は単純明快である。それは現在ある不完全な骸骨から過去の姿を適切に推測すること，つまり，経験と研究方法と普遍的調査規準に従い，活発に想像力を駆使して過去の事実の中から蓋然性の高いものを創造することである。その想像力が行う推測は人類の進歩を明らかにするためであり，「歴史家のナラティヴは我々の思考を刺激し，我々の愛情を元気づけ，我々の希望を鼓舞して我々の目標を高める」[2]ようなものでなくてはならない。このような方針に従って執筆された独立革命関係の歴史書として『サウスカロライナの歴史』(1840)や『フランシス・マリオンの伝記』(1844)などがある。ロレンゾ・サビーノ(1847)が独立革命時の王党派について考察した歴史書の中で，サウスカロライナが自由のための戦いにほとんど貢献しなかったと非難し，これにシムズが真っ向から反論したあたりから，シムズの歴史的見解は地方主義的な偏狭を帯びるようになる。奴隷制度があったために北部の兵士は南部で戦わなかったのであり，奴隷制度があったために南部は軍事力が弱体であったとサビーノが主張すれば，シムズは南軍は北軍の軍事行動に参加したにもかかわらず北軍は南部を援助しなかったこと，黒人は独立戦争中白人に対する忠誠を維持したことを指摘した。サウスカロライナ軍がチャールストンを防衛しなかったと非難されれば，シムズはチャールストン防衛のために糧食も少ない中懸命に働いた少数の南部人の功績を称えた。立ち上がるのは遅きに失したが，チャールストン陥落後は懸命に戦ったと主張した。

ロマンス作家は歴史家に許されない曖昧模糊とした世界に足を踏み入れることができるが，シムズにとって詩人の真実で最も価値のある霊感は，国家の歴史の例証，もしくは国民の性格の発展展開の中にある。詩であれロマンスであれ，大多数の人々が誇りとすることができる国家的事件を扱う芸術は，一種の象徴的影響力を国民に与えることができ，国民的詩人が後代に残す国家の歴史は国民の宗教になり，これによって国民は彼らの殉教者の苦悩の碑をまざまざと見ることができる。現在に対する慰め，もしくは将来のもっと実りある状況に希望を見い出すのが詩人の役目であるとシムズは理解していた。歴史は文明の進歩を明らかにするはずであり，社会はさらに完全なものになっていくというホイッグ的歴史観を受け入れていたシムズは，南部社会の安定した進歩を信じて疑わなかった。

シムズの同時代の歴史家にジョージ・バンクロフトがいる。そのバンクロフトもシムズと同じく過去を未来の原型と捉え，アメリカの雄大壮麗な運命を謳い上げた。歴史家は国民精神が意気揚々と発展していく過程を明らかにし，歴史的事件は当事者や直接の原因を知るだけでは不十分で，人類の発展においてそれが占める地位にまで辿らねばならないと主張した。ジャクソニアン・デモクラシィとアメリカ革命の間に文化的歴史的連関を見い出したという意味では，この二人の歴史家は同じ進歩主義的歴史観を持っていたと言ってもよい。

バンクロフトがシムズと違うところは，アメリカ革命をニューイングランド精神の開花

と捉えた点にある。ピルグリム・ファーザーズらアメリカ建国の父祖たちが始めたものを成就したのがアメリカ革命であり，この革命は反乱という原始的行為ではないと主張した。暴力による政権打倒という，革命にはつきものの暴力的側面に関して，バンクロフトはアメリカ革命とヨーロッパの反乱を区別し，前者を神の意志の成就，後者を破壊的な不協和音とした。英国からの分離独立をロックの契約説で説明しようとした急進的啓蒙派と違い，彼はメイフラワー契約にアメリカ独立宣言の本源があるとした。さらに，独立革命は国民的要求の無謀な爆発ではなく，宗教的，社会的，経済的，地域的違いを越えたコンセンサスのもとに成就された自由獲得のための戦いとされた。[3]

アメリカ革命が国民的コンセンサスのもとに始められたとするこの見解は，革命の経緯がより明らかにされている現在，欺瞞の謗りを免れえない。1775年のアメリカ白人人口のうち，三分の一が王党派，三分の一が独立派，残り三分の一が無関心派という一般的通念はさておくとしても，十三の植民地が独立という点で一致しているという姿勢を内外に向けて示す必要に迫られた大陸会議の政治的な独立決議が，バンクロフトによって神話化されていることは明らかである。

当然のことながらシムズにはバンクロフトのようなピューリタン的な視野も価値観も全く存在しなかった。革命ロマンスに見られるシムズの微妙な見解の詳細な分析は後に譲るとして，彼が革命時のサウスカロライナをどのように眺めていたかは，1856年11月11日ニューヨーク州バッファローでシムズが行った講演「革命時のサウスカロライナ」を紐解けば容易に理解できる。この時期にはシムズは明らかに偏狭なセクショナリズムを見せ始めているので，1830年代のシムズの独立革命に対する姿勢の考察にこの講演内容を適用するには慎重を要する。感情的な言辞が数多く見られ，革命当初からサウスカロライナが自由を標榜して戦ったということを主張することにシムズは躍起になっているからである。

1830年代の彼の独立革命観と重なる点はおおまかに次の三つにまとめることができる。まず革命前のサウスカロライナは英国と敵対しているどころか友好関係にあった，つまり，東部植民地を「反乱」に追いやったような経済的摩擦や社会的不満は少なかったこと，それにもかかわらず北部植民地に負けず早くから英国政府の繰り出す条例に反対したという点。第二に，マサチューセッツと違い，サウスカロライナはヨーロッパの全ての国の混成集団であり，フランス系とアイルランド系，植民地生まれの農民や職人たちは戦争に同意したが，スコットランド系とドイツ系，大多数の商人，クェーカー教徒は英国王に忠誠を誓ったということ。第三に，王党派は革命の必要を見抜くだけの賢明さを持たなかったが，彼らの行動には他人が軽率に非難できないものがあったということ。以上の三点はシムズの革命ロマンスの根幹に関わる問題であった。特に王党派に対する情状酌量的な見解は1856年の講演ではわずかな言及がなされているだけだが，1830年代の革命ロマンスでは大きなウェートを占めている。シムズは勿論独立革命が偉大なる戦いであったと賞賛している。しかし，革命ロマンスで彼が力点を置いているのは，「独立」と「革命」という高邁な信条を凌駕する，暴力と復讐が力をふるったアメリカ革命である。

(2)

1719年サウスカロライナでひとつの革命が起こった。領主植民地であったサウスカロライナの下院は，輸入税法案など下院が繰り出す法案に拒否権を発動する領主を排斥，領主

支配による統治体制を解消した。その後英国王の直接の統治下に入るが，英国王の権力は現実には縮小し続けた。イギリス本国の下院と同じ権限を国王から認められていたこの植民地議会は，国王の出先統治機関としての勅任総督と高級官僚の特権や権利を脅かすまでに至っていた。「下院」(the Commons House of Assembly) という名称自体が英国のそれと同じであるという彼らの自負を語るものであり，従ってイギリス本国が印紙条例などで抑圧的姿勢を強めてきた十八世紀中頃も，比較的穏やかな対応をする余裕があった。さらにシムズの指摘にもあるように，サウスカロライナの人口分布は都市型のマサチューセッツとは違っており，一様ではなかった。沿岸プランターと奥地住民とでは英国に対する反応はかなり異なっており，様々な職種の間でも意見の相違が多分に見られ，同質的社会形成が可能であったマサチューセッツとは大きく異なるところがあった。このため，大陸会議が各植民地に対して新政府樹立の勧告をした1776年5月以前に独自のステイト憲法を制定していたサウスカロライナは，他の植民地に先んじて英国と対峙する姿勢は見せたものの，自由を求める本格的闘争はチャールストン陥落後に始まったと言うシムズの主張は史実に基づいている。D.ウォレスは1780年以降の戦いをサウスカロライナの第二の独立革命と呼んでいるほどである。[4]『ワシントン伝』を書いたウィームズは1760年代の政治的経済的問題を省いて叙事詩的雰囲気を作り出すために戦闘場面に執着しているが，シムズの場合も同じような傾向があることは否めない。しかしながら，不在君主であった英国王が外在化していた時点の愛国派の権力奪取のための闘争ではなく，英国王の権力が顕在化した時点の闘争，つまり英軍による武力支配に対する抵抗にシムズが関心を抱かざるをえない状況があったことは確認しておく必要がある。サウスカロライナでは，ヴァージニア人のジェファーソンが「独立宣言」で主張した革命の大義，つまり「権力の一連の乱用と簒奪とが一貫した目的の下に行われ，国民を絶対的な専制政治の下に引き入れようとする意図を明らかにしているときには，そのような政府を転覆し，自らの将来の安全を擁護する新しい組織を作ることは，国民の権利であり，また義務でもある」という革命的決意は希薄であったとシムズは理解していた。[5]

『パルチザン』はチャールストン陥落後の1780年の米英両軍の衝突，『メリチャム』は1781年の事件を扱っている。どちらの作品にも米大陸軍と英軍の衝突が歴史的事件として登場するが，焦点を当てられているのは親英派民兵のトーリーと愛国派民兵のホイッグの対立であり，残忍な危害と復讐である。米大陸軍のゲイツ将軍や，英軍のコーンウォリス将軍，親英派部隊を指揮する英軍将校（例えば残虐な戦闘ぶりで悪名を得たバナスタ・タールトンという歴史上の人物など）とイギリス正規兵も登場はするものの，明らかに脇役である。確かに親英派民兵と革命派民兵の私的復讐戦と化した内戦としての南部の独立革命はシムズの占有する史観ではない。[6]しかし，シムズが当時入手できた歴史書は徹底して親英派と英軍に罵倒を浴びせ，愛国派を賛美する偏見に毒されていた。[7]ホイッグ的歴史観を持つシムズにアメリカ革命の素材として与えられたこのサウスカロライナの状況は，解決しがたい葛藤を彼の中に引き起こすことになる。

「過去の偉大さ，今は存在しない栄光，希望，恐怖，感情，行為を辿る」[8]のが真の歴史家たる芸術家の役目とシムズは考えた。従って自由のための戦いに意義を見い出し，これを謳歌するところが彼の革命ロマンスに見られたとしても驚くには価しない。マリオン軍の行動は独立戦争の展開において「明白で重要なものとは言えなくとも，直接的な影響力

を持った」[9]ものであった。自由のための闘争は至るところで行われ，大地には「真価と名声が与えられるべき，そして人間がしっかりと記憶するべき神聖な血」(*Partisan,* p. 235) が大量に流された。ジョージ・デニソンがマリオン軍を歌った詩「沼地の狐」(*Partisan*, pp. 238-240) では勇猛果敢に戦った愛国派民兵は英雄視されているが，実はこの詩人はシムズ自身である。「勇猛なる精神を称える詩を歌う，忠実なる吟遊詩人」「真の歴史家」(*Partisan*, p. 240) と称されるデニソンはシムズが創造した彼自身に他ならない。

自由と独立の大義に関して旗幟鮮明な立場を取るのが，『パルチザン』に登場するキャサリン・ウォルトンという女性で，後に『キャサリン・ウォルトン』(1851) の女主人公役を担うことになる。この女性の父親は一度は英軍と戦うが敗れ，中立を守るという条件で釈放されている。『パルチザン』ではこの中立を守るという停戦条件が英軍によって一方的に破棄され，そのためホイッグの自由のための戦いは勢いを得る。サウスカロライナにおける第二の独立革命の始まりである。

キャサリンは自由のために戦っている人々を大胆に激励する言動を持った女性であり，「大胆さ，感受性，祖国愛を持つ当時のカロライナ女性の典型」(*Partisan*, p. 140) としてシムズの注目を浴びている。英軍によるカロライナ征服を「暴政が神聖なところを侵略している」(*Partisan*, p. 278) と表現する彼女は，家宅捜索を要求する英軍将校プロクターを前にして次のように声を荒げる。

> I am a Southron, sir; one of a people not apt to suffer wrong to their friends or kindred, without resenting and resisting it; and though a woman, sir--a weak woman--I feel, sir, that I have the will and the spirit, though I may lack the skill and the strength, to endeavour to do both. (*Partisan*, p. 289)

「人間は変化するものであり，事実絶えず変化しており，絶えず人間が作った政治形態の先を行くものであるから」(*Partisan*, p. 136)，英国が誇る確立された政治形態は不変のものではないと，彼女はプロクターに宣言する。その高慢な物腰と優美なまでの上背があるキャサリンの描写にシムズはマイナスの評価は全く与えていない。

しかし物語の基調は戦いの凄惨な光景の描写にある。戦いに明け暮れる男たちから見た戦争は，自由のための戦いというキャサリンの主張する大義とは程遠い。「人間の権利と市民の自由，国の統一が大事である」(*Partisan*, p. 398) ことは自覚しながらも，彼らにとっては独立革命は殺人と暴力の風景でしかない。キャサリンの恋人で，愛国派民兵の将校のロバート・シングルトンは「手に負えず，衝動的で，血気に逸る気持ちを抑えることのできない，独立心旺盛な南部と西部の人間」(*Partisan*, p. 355) であり，英軍との戦いは平和を好む人間に神が与えた家を血と不正から守るための戦いと主張するが，しかし部下の青年ランスが相次ぐ殺人に慣れていくにつれ，陽気な笑いと優しい表情を失い，目をぎらぎら輝かせ尊大ぶるようになると，シングルトンは戦いに肯定的評価を与えるのをためらうようになる。

> It [war] is a cruel necessity, and only to be resorted to as it protects from cruelty; and must be a tyranny, even though it shields us from a greater. It is to be

excused, but not to be justified. . . . (*Partisan*, p. 401)

自分の能力と状況を高め，神に似せられて作られた存在としての力量を発揮することが人間の人間たるゆえんだが，この本来人間に有益なはずの生来の特質が常軌を逸することがある。自分の権利を守ろうとして正義を余りに追求するがために，しばしば人間はこのような過ちを犯すことになる。

> Such is that love of enterprise which sometimes leads to ungenerous conquest; such that stern desire of justice which sometimes prompts us, in defence of our own rights, not to scruple at unnecessary bloodshed. In the pursuit of both, the original purpose is soon lost sight of. We gauge not our revenges in measure with the wrongs we suffer; and the fierce excitements which grow out of their prosecution, become leading, if not legitimate, objects of pursuit themselves. . . . Yet is the enterprise itself legitimate, according to our nature; and the sense of resistance to injustice and oppression is a virtue that could not be dispensed with. They form vital necessities of our condition, but only while we keep them subordinate to our virtues and necessities. The misfortune is that we pamper them, as we do favourite children, till they rise at last into tyrants, and change places with us. (*Partisan*, pp. 397-398)

人間の力を最大限に発揮することに関して，首肯→懐疑→正当化→留保つき是認という形で論証を進めるシムズは，弁証法的論理を自分に許していない。戦争がいかに正義と自由のために戦われたものであれ，当初の目的から離れることがままあることを認めざるをえないのである。自由のための戦いを謳歌しようとするシムズの前には，ロマンスという「その道の老練な魔術師も侵害することは許されぬ」「天翔る空想ですら崇敬する」[10]真実，そしてこれを語る年代史が立ちはだかっている。血にまみれた戦いを正当化するために自由獲得のための奮闘を美化しようとするシムズの目は，「戦いの陰惨で不快な側面」(*Partisan*, p. 392) に捕らえられてしまう。

自由と平和という大義のもとに血を流すことには，ロバートの妹エミリィから強い反対が唱えられる。戦争の栄誉は流血や恐怖を隠蔽するばかりか，不当な復讐を刺激するばかりであり，正義を欲する心を復讐心に変容させてしまうと主張する。彼女は必要に迫られた戦争と，個人や国家の名誉や勢力拡大のための戦争を区別するが，いずれの場合も戦争はキリスト教の信仰に反するものだと言う。行く先短い彼女の熱弁に，キャサリンもロバートも反論できないばかりか，ロバートは戦いのさなかに妹の言葉の真実をしみじみと噛みしめる。

「南部の激しい内戦」(*Partisan*, p. 53) では残虐行為が横行し，互いの復讐心を煽っていく。主たる悪役はトーリー党員だが，彼らの蛮行のため妻を失い，その復讐を誓ってトーリー党員を殺害しようと湿地をさまようフランプトン(ランスの父親)は，作品にゴシック的恐怖感を醸し出す。狂気に駆られた彼はホイッグとともに行動するように促される。指導者や大多数の者が身の安全だけを考えているときに執拗に反逆を続ける彼はホイッグに

よって有益だと判断されたからである。こうして主義主張も持たず，金儲けのためならば強奪と略奪の限りを尽くす盗賊のトーリーと，強奪され家族を失い，復讐の鬼に化したホイッグの対立の構図の中で，アメリカ革命は強奪と復讐の血生臭い衝突として描かれていく。紙面の関係で今回分析する余裕はないが，フランプトン（これはサウスカロライナによく見られる名前である）は『パルチザン』の第5，7，8，10，22，23，29，31，47章に均整を保って登場し，正義のための戦いに暗い影を落している。

『メリチャム』では自由のための戦いは『パルチザン』以上に軟弱な地盤の上に立たされている。バークレイは権威に服従するタイプの人物で，暴風雨に晒されて腐食が進行している彼の屋敷に象徴されるように，確固とした思考と迅速な行動ができずに，結果として不正を奨励し，暴政を許している。この人物の娘ジャネットは，黒髪の女性で強い精神と冷静な言動の持ち主だが，小柄で細身であり，キャサリンの持つ力強さはない。そして彼女は力と勇気を女性が賞賛するからこそ残酷な事件が起きると主張し，キャサリンとは好対照の態度を表明する。主人公のメリチャムは父親を殺されたために復讐に燃えてホイッグの一員となり，一方その仇役のバースフィールドはメリチャムの父親に対する復讐心からトーリーの一員となって相争う。『パルチザン』では歴史の華やかな舞台の背後で展開された熾烈を極めた残酷な戦いが焦点となりながら，それでも自由と独立という戦争の大義は決して否定されていない。『パルチザン』の扉には，「自由が持つ生命力は真理と同じく／未だ死なずにいる。／自然が洞窟に祭る神聖な火と同じように／外の嵐がいかに唸り声を上げようとも／それは今も燃えている」という詩があり，この作品はこれを許容している。しかし，『メリチャム』では自由のための戦いというアメリカ革命が持つ側面すらも影を潜める。

（3）

シムズが革命期のサウスカロライナの状況を内戦と捉え，各階層が対立を露にした内乱として描写する傾向があることが前節で明らかにされた。同時に独立革命に対する賛辞と戦争の悲惨さがシムズの意識の中で衝突し，自由と剥奪された権利を獲得するための戦いというピューリタン的神話が欠如していることも明らかになった。このような観点はホイッグと対立したトーリーを描写するシムズの姿勢にも歴然とした影響を与えている。

トーリーは主たる主義主張を持たない傭兵か，盗賊として描かれているが，その中で両作品に登場するブロネイはシムズが好んで用いるゴシック的雰囲気を生み出している。陰湿で血色の悪い顔色をし，目が奇妙なほど飛び出している彼は，誰であれ見る者の心に嫌悪を催させるが，特にホイッグの闘士ハンフリーズに徹底的に敵視され忌み嫌われる。カトーバインディアンとの混血であることが彼が差別される最大の理由である。捕虜になったときも，危険な人物として，ハンフリーズによって他のトーリーとは区別される。自分の血に拘るブロネイは，自分が混血児であることを理由にハンフリーズに蔑まれるのを恨み，終始彼を殺そうとつけ狙う。このブロネイをシムズは次のように描写する。

> Goggle was as warped in morals as he was blear in vision; a wretch aptly fitted for the horse-thief, the tory, and murderer. His objects were evil generally, and he had no scruples as to the means by which to secure them. Equally indifferent to

> him what commandment he violated in these practices; for, with little regard from society, he had no sympathy with it, and only obeyed its laws as he feared and would avoid the penalties. He hated society accordingly as he was compelled to fear it. He looked upon it as a power to be destroyed with the opportunity, as a spoil to be appropriated with the chance for its attainment; and the moods of such a nature were impatient for exercise, even upon occasions when he could hope no addition to his pleasure or his profit from their indulgence. (*Partisan*, p. 178)

このようにブロネイの悪虐非道は社会の最下層におとしめられていることへの社会的不満に原因があるとされる。魔女の評判を持つ母親が犯した過ちの人生を歩かされ，回りの白人や黒人からも軽蔑されたために，ただ社会に反抗するために悪に執着しているのである。

ブロネイの母が彼を連れて英軍によるホイッグの絞首刑を見に行くのも,「息子を踏みつけ，息子を笑い，罵倒する」(*Partisan*, pp. 524-525) 上流階級の人間が殺されるのを楽しみにしているからである。息子のためならば悪霊に助勢を求めることもやってのける彼女は，仲間を助けに来たハンフリーズたちの馬の蹄の下敷になり，命を落としてしまう。この『パルチザン』の結末は，ホイッグとトーリーの衝突した内乱において前者が勝利を収める歴史的展開に明確な意義を付与しておらず，シムズが自分で提出した問題を回避しているように見えるが，実はブロネイとハンフリーズの対立をさらに先鋭化するための戦略であることが『メリチャム』で判明する。

ブロネイの描写で終わった前作を受け継いで始まった『メリチャム』は，彼の復讐の増大に始まり，彼の死でその幕を閉じる。母の死を悼む彼はインディアンと同じようにその悲しみを表に出すことはせず，復讐に変容させる。

> The vindictive blood within him--his irresponsible position in society--the severity of the treatment to which, justly or not, he had been subjected by one of the parties between whom the province was divided--and the recent dispensation which had deprived him of the companionship of one, who, however despicable and disgusting to all others, was at least a mother to him--were circumstances well calculated to arouse the savage desire of vengeance upon those to whom any of his sufferings might be attributed.[11]

徹底的に回りの者から蔑まれてきたブロネイは，しかし，ジャネット・バークレイと接触することで変化を見せる。

> His mind, probably for the first time, seemed to take in a new sentiment of the loveliness of virtue. Though blear-eyed, he was not blind; and, as she did not seem to behold his deformity, he was able to examine her beauty. In morals, the German theory of the senses is more than half right. The odor and the color are in us, rather than in the objects of our survey; and yet, unless acted upon by

> external influences, the latent capacity might never expand into energy and consciousness. To bring out this capacity is the office of education, and this art had never so far acted upon the half-breed, as to show him how much there was of a good nature dormant, and silent, and mingled up with the evil within him. His education, in a leading respect, was yet to begin. (*Mellichampe*, pp. 75-76)

ブロネイの中に潜む善という美徳は美しいジャネットを触媒にして姿を見せる。興味深いことに，この眠っている能力を最大限に引き出すことが教育の務めであるとする帰納的結論が提出されるが，『マーティン・フェイバー』(1833) でシムズが明らかにしているように，実はシムズが言う教育とはある人物を回りの者が変化させる不可避の力である。「我々が見る対象よりはむしろ我々の中に存在する」においと色が，善とは対立する悪をブロネイの中に育て上げたのであり，ブロネイが反感を抱く上流社会に属するはずのジャネットに彼が反発を覚えなかったのは，彼女が彼の醜さを見ないからである。「いかなる時であれ，憎んだり軽蔑したりするべきものを彼の肉体的奇形に見ることをしない」(*Mellichampe*, p. 333) ジャネットの前では，彼の「憎しみと狡猾と貪欲を表す表情」(*Mellichampe*, p. 333) は消え失せてしまう。ハンフリーズたちへの復讐を忘れていないブロネイは，ジャネットの側にいても自分で確かめたマリオン軍の位置の情報を英軍に売ろうとしており，彼女は彼の穏やかな痴呆的表情に騙されてしまっているのだが，少なくともメリチャムを秘かに殺すように金を握らせるバースフィールドの提案をブロネイが受け入れず，やがてバースフィールドの策謀をジャネットに打ち明けるのは，彼女が彼を軽蔑した様子を見せないからである。

ハンフリーズがブロネイを沼地の糸杉のうろに閉じ込めるシーンは凄惨を極める。傷を負ったブロネイはひと思いに殺してくれと嘆願するが，これも許さず彼を眺めるハンフリーズの顔は悪意ある喜びを浮かべ，逆に糸杉から這い出す可能性を全く閉ざされたブロネイの哀れな姿は威厳の様相すら帯びる。ハンフリーズがブロネイを閉じ込めるために打ち込んだくさびをブロネイが引き抜こうとすると，ハンフリーズはその手を木槌のような木で情け容赦なく潰して，塵芥としてブロネイを社会のうろに閉じ込めてしまう。沼地は外敵から保護された世界であり，革命軍の民兵が避難すると同時に社会的に排除された逃亡者が身を隠す地帯でもある。沼地は「自由を好む者が自由の祭壇を作り，敵にその煙によって所在を知られることなく自由の神聖な火を見守ることのできる」[12]領域であり，物惜しみしない自然が与えてくれる心地よい貢物で戦場の傷を癒すことができる領域でもあるが，この自由と平和が支配する沼地も実は血生臭い暴力を隠蔽しているだけなのだ。

ブロネイは厳密な意味ではトーリーには属さないが，狭義のトーリーも数多く作品に登場する。英軍と緊密な連絡を取りながら行動したトーリーは，『パルチザン』では最下層の階級の出身か，盗賊の集団として描かれていたのに対して，『メリチャム』ではトーリーがホイッグと敵対するようになった経緯が詳細に描かれていく。メリチャムが個人的な復讐のために市民軍に属しているように，バースフィールドがトーリーとなってカディパーの農園を乗っ取り，メリチャムを殺そうとするのも唐突に彼に加えられた危害のせいである。

『メリチャム』はホイッグがトーリー勢力を粉砕し，メリチャムが先祖代々の農園と恋人のジャネットを奪い返す経緯が物語の主調になっているが，メリチャムと対立するバー

スフィールドは，シムズがその序文で歴史的に実在した人物を素材にしたと断わっているように，革命時のトーリーの状況を史実に則って描こうとしたシムズの姿勢から自然に生まれたものであった。バースフィールドの主張は多くの紙面を割いて描写される。結局は「がさつで洗練されていない魂が抱く自分中心的な目的しか持たない」(*Mellichampe*, p. 88) 彼は歴史の闇に葬られていくが，彼の主張はジャネットを驚愕させ，彼女に反駁を許さない。メリチャムの父の功績を称えるジャネットに，バースフィールドは自分がトーリーになった経緯を語って聞かせる。

> When this cruel and unnatural war commenced in South Carolina, I had taken no part on either side. The violence of the whigs around me, Colonel Mellichampe among them and the most active among them, toward all those not thinking with themselves, revolted my feelings and my pride, if it did not offend my principles. I was indignant that, while insisting upon all the rights of free judgment for themselves, they should at the same time deny a like liberty to others. And yet they raved constantly of liberty. It was, in their mouths, a perpetual word, and with them it signified everything and nothing. It was to give them a free charter for any and every practice, and it was to deprive all others of every right, natural and acquired. I dared to disagree--I dared to think differently, and to speak my opinions aloud, though I lifted no weapon, as yet, to sustain them. . . . Was it toryism to think according to my understanding, and to speak the opinions which I honestly entertained? (*Mellichampe*, pp. 310-311)

富もなく，有力者でもない彼が自分の意見を披露するということは，農園主からすれば傲慢無礼なことであった。真夜中に顔に色を塗り，武装して現れた隣人たちは，「新たに得た自由を僅かばかり振り回しながら」(*Mellichampe*, p. 312) 彼の家に押し入り，寝ていた彼を引きずり出し，木に縛りつけ，気を失うまで鞭打ちのリンチを加える。意識が戻ると沸騰するタールを体中にかけ，その後川に彼を投げ込む。この事件がバースフィールドをひとりのトーリーに変える。トーリーであることと「タールとフェザー」による処罰の因果関係が逆転し，マサチューセッツで展開される自由と独立のための闘争が暗に揶揄されている。

『メリチャム』の最後の場面はホイッグの気高い主義主張の確認を描写している。メリチャムの補佐役であったウィザースプーンが息を引き取る際に，最初から最期までホイッグで通したことを闘士マリオンに認めてもらう場面で小説の幕は閉じる。この人物に関して否定的評価は与えようがないが，それは彼が小説の中では脇役であるからである。主役たるメリチャムや，悪役のバースフィールド，ブロネイたちが奏でた内戦の不協和音は消えない。バースフィールドはウィザースプーンの有無を言わさぬ命令に呆然と従う黒人奴隷シピオに殴り殺される。ブロネイはメリチャムに全く信用されないまま，ジャネットのためにメリチャムを逃がそうとして，トーリーの放った弾丸に当たって死ぬ。このように愛国派民兵とは無縁な力が二人を南部社会から取り除いてしまう。

(4)

ウェイクリンはシムズの革命ロマンスは革命後の国家統一の必要性から生まれたとしている。平均的市民が混乱の時代に特権階級のエリート層の指導を仰ぐのが特に重要だとシムズは考えたのであり，つまるところ，シムズにとってフィクションとは政治的信念の表現の手段にすぎないとウェイクリンは断定している。[13]モルトカ・ハンセンも同様の評価を下している。彼によると，シムズにとって歴史を追い求めることは政治的追求であり，トーリーは進歩に反対する狭量を持つためにシムズによって非難されおり，シムズにとってサウスカロライナの奥地のトーリー党員が低地帯の貴族のホイッグ党員の主張に正当な不満を持っていたことは重要ではなく，革命中の戦争の残酷さを説明するのに役に立っても正当化することにはならなかったと結論づけている。[14]

しかし，小説家シムズは政治的信念の自己表現という純粋な目的のため，また一階級のスポークスマンとして書いてはいない。確かにトーリー党員の主張は正当化されてはいないが，また反対にイデオロギー的に正邪が決定されているわけでもない。トーリーが独自の主義主張を標榜して，抑圧的な専制政治を自ら選択したのであれば，そしてそれが正当化されたホイッグの主張と対峙されているのであれば，彼らが排除されていくストーリーの展開は上記の見解を妥当なものにするかもしれない。だが革命ロマンスで衝突する愛国派も親英派も英軍の武力行使を契機に個人的な動機から自分の旗幟を鮮明にしている。愛国派の大義と親英派の権力志向の衝突は階層間の対立が一時的に生み出したものにすぎない。当時の上品な読者の反発を意識していたシムズが下層階級の人間の描写に拘り続けたのも,「打倒した専制政治よりも危険で非道な行為を生み出してしまいがちな愛国主義の行き過ぎ」(*Mellichampe*, p. 2) を捉えるためであった。

今回扱った革命ロマンスはシムズが改革派に属していたときの作品であり，ホイッグ的歴史観に執着していたはずのシムズが独立革命を距離をおいて眺めていたことは驚くべきことである。二つの作品には革命時の社会の様々な政治的考えが渦巻き，衝突し合っているように見える。自由のための戦いは英軍との衝突という形で現れるが，これは十三植民地が英国と対決した歴史的事件である。しかし，それは革命ロマンスでは主たるテーマとはなりえていない。『パルチザン』も『メリチャム』もアメリカ革命に愛国主義的栄光を与えていない。シムズが捉えるアメリカ革命は，英国との対決ではなく，革命を契機として暴露された州内の社会的動乱であった。

ロマンス作家としてシムズの先輩に当たるクーパーも多くの革命ロマンスを書いている。人間の生得の権利のために戦われた真の革命としてその栄光を称える一方で，高貴な人間たちがやむを得ず武力に訴えた闘争という指摘，また，一種の内乱であり，政治的主義主張よりは個人が選択した主義への忠誠度こそが注目に価いするという指摘がなされている。「『スパイ』の中で，独立革命の真の重要性はイギリス人とアメリカ人の間の歴史的戦闘ではなく，アメリカにおける階級間の闘争にあることを，クーパーは無意識のうちに暗示している」[15]と言うこともできよう。しかし，歴史に残る英米両軍の武力衝突すら存在しなかったサウスカロライナに生きたシムズにとって，アメリカ独立革命は主義主張の衝突ですらなく，ただ復讐が復讐を呼び，残忍な暴力が猛威をふるう様相が濃い内乱であった。

註

1　Ralph Waldo Emerson, *Nature, Addresses and Lectures* (Boston: Houghton, Mifflin and Company, 1903), p. 110. W. H. Gardiner については Neal Frank Doubleday, "Hawthorne and Literary Nationalism," *American Literature*, 12 (1941), 448を参照。

2　William Gilmore Simms, *Views and Reviews in American Literature, History and Fiction*, 1st series (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1962), p. 38.

3　George Bancroft の史観に関しては Sacvan Bercovitch, *The Rites of Assent: Transformations in the Symbolic Construction of America* (New York: Routledge, 1993), pp. 168-193が詳しい。

4　David Duncan Wallace, *South Carolina: A Short History,* 1520-1948 (Columbia: Univ. of South Carolina Press, 1961), pp. 295-331. サウスカロライナのアメリカ独立革命時の政治的状況については John Richard Alden, *The South in the Revolution,* 1763-1789 (n. p.: Louisiana State Univ. Press, 1957), pp. 91-95を参照。

5　アメリカにおける諸植民地の「独立」と「革命」の大義の曖昧性については，斎藤 眞『アメリカ革命史研究——自由と統合』(東京大学出版会，1992)「革命と統合」の章参照。「独立宣言」の訳は斎藤訳をそのまま用いた。

6　前掲書の「民兵制度と独立革命戦争」の章参照。

7　Mary Ann Wimsatt, *The Major Fiction of William Gilmore Simms: Cultural Traditions and Literary Form* (Baton Rouge: Louisiana State Univ. Press, 1989), p. 65.

8　*Views and Reviews*, p. 15.

9　William Gilmore Simms, *The Partisan: A Romance of the Revolution* (New York: Lovell, Coryell & Company, n. d.), p. 234. 以下 *Partisan* と略し，この作品に関する引用はすべてこの版による。

10　William Gilmore Simms, *The Yemassee: A Romance of Carolina* (Schenectady: New College and Univ. Press, 1964), p. 404.

11　William Gilmore Simms, *Mellichampe: A Legend of the Santee* (Chicago: Donohue, Henneberry & Co., 1890), p. 19. 以下 *Mellichampe* と略し，この作品に関する引用はすべてこの版による。

12　William Gilmore Simms, *The Scout* (Spartanburg: The Reprint Company, Publishers, 1976), p. 14. Annette Kolodny はシムズの描写する沼地が受動的な幼年期への退行を象徴していると解釈し，Miller はシムズのアンビヴァレンスを読み込んでいる。David C. Miller, *Dark Eden: The Swamp in Nineteenth-Century American Literature* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1989), pp. 77-88を参照。

13　Jon Wakelyn, *The Politics of a Literary Man: William Gilmore Simms* (Westport: Greenwood Press, Inc., 1973), p. 115.

14　David Moltke-Hansen, "Ordered Progress: The Historical Philosophy of William Gilmore Simms," in John Caldwell Guilds, ed., *"Long Years of Neglect": The Work and Reputation of William Gilmore Simms* (Fayetteville: The Univ. of Arkansas Press, 1988), pp. 126-147.

15　John P. McWilliams, Jr., *Political Justice in a Republic: James Fenimore Cooper's America* (Berkeley: Univ. of California Press, 1972), p. 54. クーパーの独立革命に対する姿勢については pp. 32-99を参照。

(平成6年9月12日受理)